

提出日:2022年 2 月 3 日

公益財団法人 海外子女教育振興財団
AG5 事務局 様

2021 年度 AG5 報告書

1. 報告者	
(1) 学校名	シンガポール日本人学校チャンギ校
(2) 氏名	山口 彩乃
2. 実施体制	
2019 年度 4名のプロジェクトメンバーで基礎研究 2020 年度 校内研究として全校実施 2021 年度 校内研究として全校実施	
3. テーマ	
多様な文化を理解・尊重し、自らの考え、進んで行動する児童の育成 ～PYP の視点を踏まえた探究型学習のカリキュラム構築と授業実践を通して～	
4. 目的と概要	
〈目的〉 ① IB(PYP)の理念を取り入れ、本校探究科基礎、生活科のカリキュラムの教材開発 ② IB(PYP)の探究手法から、教師は新しい教え方、児童は学び方を身につける。	
5. 今年度実施した取り組み (※研究会や出張等は日程も含め記載してください)	
① 関西大学黒上晴夫教授を講師に招き、思考ツールや探究科の評価についての研修会を実施した。 (9月20日) ② 実質、二学期からの開始だったのが全学年で研究授業を行った。 (動画視聴、人数制限での参観) ③ 協議会は行うことができなかったため、1 月末に研究のまとめとして、全職員で今年度の各学年の取り組みや成果と課題を共有した。(1月25日) ④ ICT 研修を受講し、Google を使用した共同作業等を実践した。(7月・8月)	
6. 今年度の成果・効果 (※詳細に記載し、成果物があれば添付してください)	
① 中心概念(Central Idea)の精選を行い、実践の中で活用することができた。 ② 研修で学んだことを活かし、児童の思考を深める手立てとして、様々な思考ツールを活用した。 ③ 外部との接点をもち、オンライン等で話を聞くなど、体験的な学習の一つとして行うことができた。 ④ Google を使用した共同作業では、調べたことを共有したり、数人でまとめたりすることに活用することができた。共同作業が可能なことで、効率よく情報の共有ができた。 ⑤ ICT を活用した資料保管方法などを開発できている。	
7. まとめ	
❶ CI のような中心概念を扱う授業づくりは、学ぶ目的やねらいをより明確にしていけないとできない。 ❷ 思考ツールは、児童の思考を整理し、再考するためのツールとして有効に使うことができる。 ❸ 体験的な活動は、問題解決において必須であり、また児童が課題に対して自分のこととして捉えるためにも必要な活動である。	

8. 次年度の計画

- ❶3年間で培った IB 教育の研究で学んだことを取り入れながら、生活科・探究科の研究を行っていく。
- ❷日本人学校という特色を活かして、シンガポールならではの教材の開発に努めていく。
そして、現地理解教育につなげていく。
- ❸年間を通して講師を招いて助言いただく。

9. 所感

昨年度の研究を活かし、各教師、学年部の工夫により、授業研究が行われた。IB の概念は、理解しているものの、どのように実践してよいのか困惑しながら取り組んだのも事実だ。Central Idea など、高度な概念学習を作るうえでは、他校での授業実践や事例を多く知り、本校の特色を取り入れながら、系統性をもった全体計画を作成することが大切だと感じた。知識だけで実践することには限界があり、我々教員が本校の子ども達の実態を理解し、“目指す児童像”を共有して、実践を行っていくことが必須であると感じる。また、探究科は教科横断的な学習ともいえる。IB 教育を学校として取り組んでいくのならば、他の教科との関連性を考え、学校として全体計画を作成し、1年生から6年生まで系統性をもって IB 教育が行える体制を作っていくことが、理想と考える。

IB において、やはり体験的、そして問題解決型の学習が、子ども達にとっても教師自身にとっても非常にやりがいがあると感じる。インターネットであらゆる情報が手に入る時代で、簡単に素早く情報を得ることができるが、与えられた情報だけでは上辺だけの理解や思考にすぎない。実際に聞いて、話して、やってみて学んだことは、自分事として物事を捉え、新たな考えを導き出す大切な過程だ。本年度は、昨年度にもましてシンガポールではコロナ禍での制限が厳しかった。校外学習を行うことはもちろん、校内でさえも非常に厳しい人数制限や行動制限がある。そういった中で、今年度のチャンギ小学校の先生方は、学年を中心にどのようにしたら子どもたちに実体験を伴った活動ができるかを考え、あらゆる工夫をして取り組んできた。また、日本とは違うこのシンガポールの環境を生かした素材を各学年が取り上げていたことも、チャンギ校の教師の思いによるものだ。“こんな子どもたちになってほしい”“こんな力をつけてほしい”という教師の願いが、表れていたと思う。児童にきっとその思いが届いているに違いない。これからも、その思いを大切に、全職員で研究に励んでいきたい。

※記入欄は適宜拡張してください。